

幼児期における造形表現 活動の理念的基礎

松 原 郁 二

1 幼児の人間の成長

馬の子が、生まれるとすぐ、ひょろひょろしながらも、親の後を追ってあるいていくように、人間以外の動物が、それぞれ形式的なちがいはあるにしても、その動物固有の性格をもって生まれるのに比べると、人間は、人の格好はしていても、能力的には、まだ人間になり切らないままで生まれてくる。人間が生理的早産だといわれることは、けだものに育てられた野生児の実例が示しているように、生後の教育次第でどのようにもなり得るからである。

人間行為の根源になる脳細胞は、その質も数も、生まれたときは平等に近い部品の配給を受けているのだから、われわれが、遺伝だとあきらめている問題も、大脳辺縁系の働きとしての本能的情動や身体機能に関するもの以外の働きについては、すなわち大脳新皮質に関連する能力は、生後の教育によって、ひとりひとりのパーソナリティが形成せられるということである。例えば音楽や数学の才能にしても、天才は別にして、遺伝よりは環境の教育によって左右されることの方が大きいと言われている。すなわち、みんなが同質、同数の部品をそろえてはいるが、それを、まとまった一つのものとして組み立てて完成するのは生後に課せられた課題なのである。それは140億もあると言われる大脳細胞間のシナプス連結が、どのように配線されるかという点にかかっているものである。

1・1 人間の内的生命力と外的実力

シナプス連結について考える場合には、そこ

に2種類⁽²⁾の違った活動の系列があることをはっきりしておかねばならない。これをコンピューターにたとえれば一つはハードウェアとしての機能をもつものであり、他の一つは、その機能をどのような場で活用するかというプログラミングの根底となるソフトウェアの能力である。ハードウェアは大脳新皮質の後部に位置する後頭葉や側頭葉などにある感覚野・運動野・連合野の働きである。感覚野は外からの情報を取り入れる聴覚・視覚・触覚などであり、連合野は理解・認識・記憶の役目をもっておるもので、物質や現象として直接五感に触れるものの認知や、文化遺産など、きまりきった事項について理解受容する意味で、この方を仮に外的実力と考える。一般にIQ（知能指数）に示される数値には、この外的能力が大きく左右する。

それに反してソフトウェア（内的生命力）は、前頭連合野の働きを中心にするものであって、諸情報を組み合わせて思考したり、これまでにない新しい事項について直観・想像したり、やる気の情熱を燃やしたり、それらの活動の結果を喜んだり悲しんだりするように、人間性表出の働きをするものである。内的能力はCQ（創造性指数）として、その個人の流ちょう性・柔軟性・独自性・具体性などを数値的に示している。なおIQとCQとは必ずしも一致するものでないことも理解しておかねばならない。幼児の造形的表現活動を教育的に考えてみようとするとき、この外的実力と内的生命力について明らかにしておく必要がある。

1・1・1 内的生命力（soft ware）

ソフトウェアは人間的なという言葉がびった

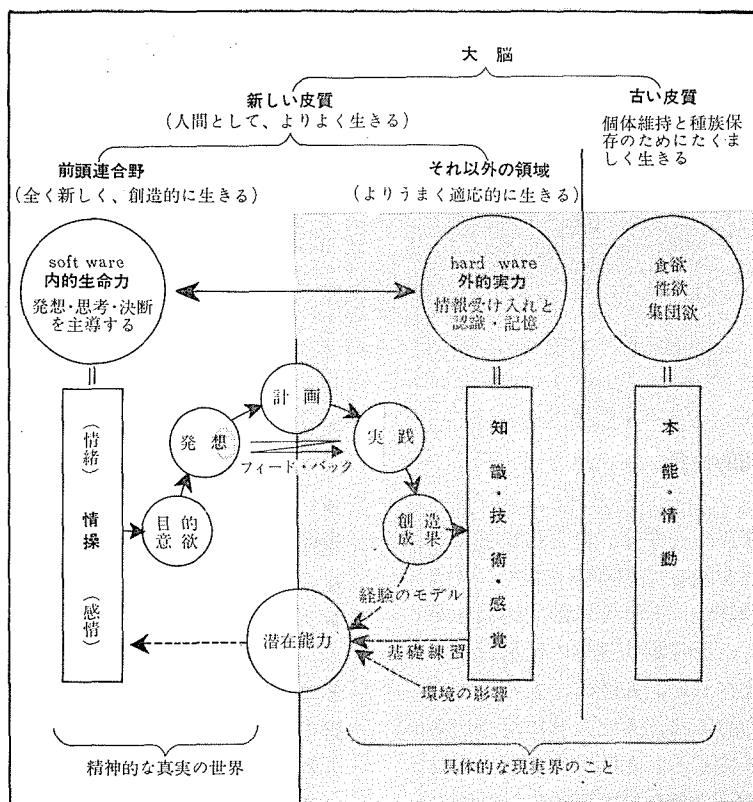
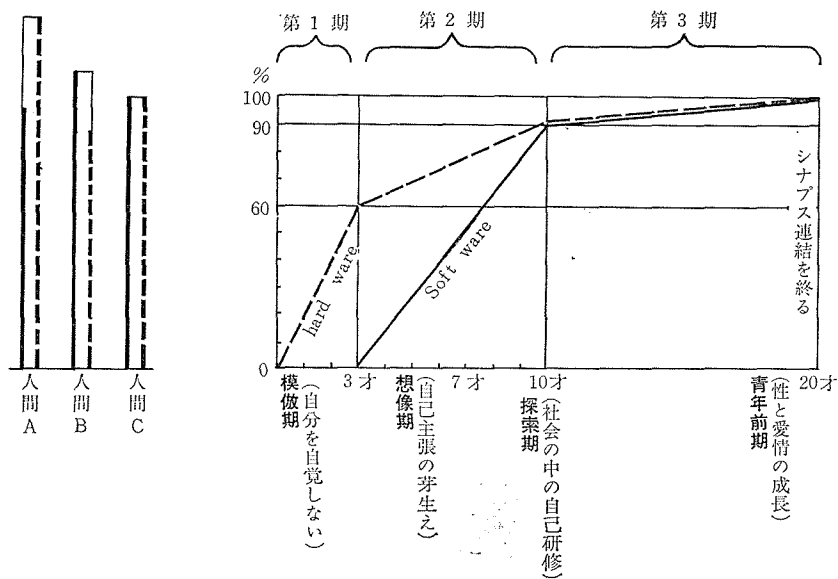


図 1. 大脳の働きと人間行為の関係図



(図 2) シナプス連結の段階想像図

りする性格である。すなわち、有機的総合的な働きであり、問題解決に当たっても、ある方向性はもっているが、アナロジー⁽⁵⁾(analogy) な情報に類するもので、まだ実在として固定する以前のものである。ということは、無限に流動し変化しながら、そこから次々に創造の具体的なアイデアを泉のように出し続けてくれる根源的なエネルギーである。また、生きた人間として、個性的なパーソナリティをもち、主体的・能動的に、自由に考え自由に行動する核となるものである。しかし、また、血の通った生き身だから、問題ととり組むことが真剣であればあるだけ、迷いがあり、なやみもある。そしてまた、ときに間違いをしたり忘れることもある。その点を必要以上に気にすると人間的思考の停止や行動の休止になる。しかし、人間にはそのようなハンディキャップを補って餘りあるものとして、直観力や想像力が天から与えられている。その上、将来の成功を信じきって努力する生命力をもっている。すなわち、過去の一切を背負って現代の地点に立ち、未来に連続した見通しを立てて情熱を燃やし続けるものである。人間世界の文明や文化の発展は、そこから生まれる。

「図1」について

大脳の働きと人間的行為の関係を構造的に示した図で、大脳の働きを大きく3つにわけた。古い皮質の働きは、けだものも同じように、教育しなくても立派に育つ本能だから、ここでは除外して考えてもよいが、これが満たされないと、情動(快・不快・恐れ・怒り)に左右されて、正常な人間生活を乱す恐れがある。

教育上重要なのは新皮質の働きである。前頭連合野は、人間特有の働きとして、やる気や抑止の行為を主導するものであり、また感情の母体でもあり、自律的に生きる人間の内的生命力となるものである。

前頭葉以外の領域の働きは、はっきりきまっている事柄や直接五官に訴える諸情報の処理・記憶や運動発現の役目をするもので、人間能力としては、前者がソフトウェアの性格であるのに比べて、ハードウェアとして、現実の世界で、よりうまく適応的に生きる道具

的な性格のものである。

ソフトウェアとハードウェアを小円形の連続で結んだ図は、人間が一つの価値を創造する過程を示したものであり、そのところにこそ、人間としての「生きがい」と幸福を感じるものである。そして、さらに人間が向上発展するためにも、両者の関連はそれを切り離しては考えられないことを示している。

「図2」について

図の左側は、人間A・B・Cが、それぞれハードウェアとソフトウェアの能力を異にしたままシナプス連結を完了したものであり、右側は、人間Cが0才から20才までに配線を完了する過程を想像して示したものである。

この図表を一見してわかるように、ハードウェアでは0才から3才頃まで、ソフトウェアでは3才頃から10才までの急上昇振りが、しかも、やりなおしのきかないものであるだけに、教育上きわめて重要な期間だということである。

1・1・2 外的実力 (hard ware)

それに対してハードウェアの能力はデジタル⁽⁶⁾(digital) な情報に類するもので、はっきりした存在である。それは人間が発見したり、創作したものもあるが一旦具体化したそのもの自体は、動きのとれない固定的な法則や原理の類で非人間的だと言われるものである。しかし、人間が、この現象界で生活していくためには、それらは絶対に必要な道具である。すなわち人間能力としては部品に当るもので、瞬間瞬間の、しかも部分的な事象間の問題として、自然や人間社会の秩序に規制される性格のものである。その代表的なものがコンピューターであろう。コンピューターは間違いをしないし忘れることもない。そして複雑な計算をおそろしく早くやってくれるということで時代の脚光をあびている。そんなことから、コンピューターのような能力をもちたいと考える人間があるとすればとんでもないことである。コンピューターがどんなに優秀でも道具以上にはなれないもので、主体的には行動できないし、自由もない。受動的に人間に使用されることによってのみ、その存在の意義を見出すことができるのである。

る。コンピューターは間違えない忘れないといっても、実はメカニズムが故障しない限り、間違えることも忘れることもできないのである。

1・2 内的生命力と外的実力の関係

以上述べてきたように、両者の間には、はっきり違った性格がある。しかし、それは、たてまえとして言えることであって、この両者の関係は、精神とその実現の問題であり、色即空、空即是色の関係にあって、人間行為の中では、この両者を別別に考えることはできない。

図表でも示したように、人間の心的活動の中心となるものが感情的複合体（みがかれた感情）としての情操であり、これを個性的なパーソナリティの母体と考える。この場合の情操は、知に対立する狭義の情操ではない。岡潔が心的活動を邪知・分別知・真知⁽⁷⁾にわけて述べているが、その真知に当るものである。邪知は本能的感情も感じられるような世間知であり、分別知は論理を尽して判断するものであるが、いずれも現実の世界から離れられないものである。しかし真知は、個性の真髄を貫いて地軸までも通じている第六感の世界で、知・情・意を統合する純粋直観によって示される。

図表1では、感情(feeling)情操(sentiment)情緒(emotion)を区別して示してある。これらは微妙な人間心情のことで、用語法にもいろいろな立場があるが、ここでは一応次のように考えておく。すなわち、この情操の基盤になるものを感情と考える。純粋の感情は、水や空気と同じように、先決問題として公害など受けていない無色透明のものでなければならない。感情はピアジェ(Jean Piaget)の述べているように、ある行為のエネルギー面であって、その大小を示すだけのものである。快・不快などの感情は別の知識が加わったものとする。この純粋の感情にみがきをかけ、個性的な潜在能力として絶えず向上していくものを情操と考える。この情操が、ある問題ととり組んだときの発動状態を情緒と考えれば、情緒も情操も同じ海水のようなもので、情操がパーソナリティの母体として、奥深いところに、でんと静まりかえっているとすれば、情緒は海面の波のようなもので、対決した問題の内容に応じてさまざまな動

きをするものである。これらの3つを統合して広義の感情と考えてもよい。

情緒機能としての直観や想像によって、問題解決の発想や決断がなされることになる。内的直観の場では、いわゆるソフトウェアの能力として、アナロジイな方向づけとしてのひらめきは出ているが、まだ具体的な像を結んでいるとは言えない。しかしそのことも瞬時の問題で、現実的な情報の一片が飛び込んでくることによって、実在としての結晶活動が激急に展開する。すなわち直観としてとらえた実相を現象界のものとして理性が受けとめ、知識・技術・感覚というハードウェアの能力を総合的に働かせることによって一つのまとまった成果を具体的に形成するものである。この創造過程の段階的分析は改めて考えるとして、ここではソフトウェアとハードウェアの緊密な結びつきを説明するにとどめる。勝れた芸術家には、それぞれ、その専門分野に応じて、直観のひらめきが、媒材の具体的な形として示されると言われるほど、心情と形式とは密接な関連をもっているものである。そのことは、人間教育という立場からハードウェアの部分的能力について基礎トレーニングをすることや、総合的人間活動としての創造の体験が、人生の貴重な経験のモデルとして、ソフトウェアの情操を高めるための潜在力となっていることでもわかる。このように、人間の内的能力と外的能力との関係は、絶えず交流しつつ相互にみがき合って向上する。

1・3 シナプス連結の段階と教育⁽⁸⁾

大脳細胞間の配線がすべて完了するのが20才とされている。しかも、のんびりしておられないのは、図表2でも示したようにハードウェアの配線は3才頃までにその60パーセントの連絡を終るといふ。この3才頃までをシナプス連結の第1期と考える。この期間の配線は無条件の模倣によってなされる。その手本は、家庭環境であり、しかも肉体的接触の一番多い人の影響が強いのである。昔から、しつけは無言で行うものだと言われているが、それも改まって向い合ったときのよそいきの表情でなくて、両親などの横顔や後姿から感じとる影響がより強く焼

きつけられるということであるから、教育は全身全霊を込めた行為として身をもって範を示すものでなければならない。結局第一期の配線は母親の愛と信を中心とするものと言える。

その上、造形表現の立場から見のがせないことは、この期間の頭脳配線に大きな影響を与えるものとして、手足の運動があげられる。さわる、こわす、破る、かきまわすことから構成への諸活動を通して触れる、見る、試す、作る、想う、確めることなど、経験の変化や発展を通して、より緻密なシナプス連絡がなされるとすれば、幼児期の自由な製作表現とそのための豊かな資料提供には、何をおいても協力していかなければならない。数千万年前からの人類の発生経過から考えても、両足で立ち上ることから、手の使用が発達し、道具作りが人間としての頭脳を発達させる原因になったこともうなづけることである。

第2期は、ソフトウェアの配線をはじめる3・4才頃から10才頃までの期間である。その間7・8才頃に配線ピッチの山があるが、何よりも大事なことは、その間にシナプス連結の90パーセントを終るということである。そして、無条件に模倣していたこれまでの様子とちがって、急に自我意識が発達し、自己主張をするようになり、根掘り葉掘り質問して究明する頃である。この前半は想像期と言われるときで、自由自在に自己のイメージを発展させる頃で、ごっこ遊びや童話、漫画に夢中になることでわかる。このように主体的に考えを発展させていく態度は、前頭連合野の働かない動物では考えられないことである。これからの時代を生きぬく人間教育の立場から、主体性の基礎をかため、イメージ作りの芽生えを育て、創造性を育てる最初の訓練期である。また幼稚園の生活も加えて、集団の中で秩序を重んずる態度や、人の心と心との触れ合いで、人間の情感を向上させつつ、探索期を迎える大切な時期である。

しかも、時は瞬時も待ってはくれないし、繰返してもくれない。シナプス連結では、その瞬間瞬間の経験をそのままソフトウェアの能力として記録する。そして、それは後からの修正もできないきびしいものである。しかし人びと

は、その記録を目前に見ることができないから、きわめてのんびりと時の経過を見送っている。そのことは、考えようによっては、頭脳配線をフェアにするためによいことかも知れない。しかし、考えてみると、一生を通して使用し続けねばならないソフトウェア90パーセントの構成が決定されることは重大である。その上ソフトウェアの能力は、知識のように、外から教えたり、徹夜で暗記するようなことでは身につかない。自ら感じ、自ら考え、自ら実践して自分のソフトウェアを使用することによってのみみがき上げることができるのだから、この間の教育としては、テーマを与えて体験させたり、遊びその他の生活を通して行われるもので、家庭では母の愛と信に加えて、父親の意欲的な生活態度が、子供の将来に強い影響を与えることなど考えてみると、子供をとりまく生活が、家庭も学校も社会もすべて教育の現場であることを再確認するものである。

第3期のシナプス連結は、幼児教育に直接関係はないが、10才頃から20才までの間に、残りの10パーセントを完了するものである。この頃は、脳細胞のからみ合いの分量から考えると僅少ではあるが、この期間の最初は探索期と言われているように、成人の生活から吸収する意欲の旺盛なときであり、ギャングエイジとしてグループ活動の中で、友情・協力・責任・奉仕などを通して自己を浄化していくのであり、さらに青年前期を迎えて、心情のこまやかな成長と一しょに、自己の身体や生理の急激な発達におどろきながら、合理性と情意の複雑な関係の交錯する思春期に入る。この第3期の指導で重要なことは、自己を信じて自律的に生きる態度と他方自然や社会の秩序を重んずるきびしい態度とのけじめのつけ方をはっきりさせることである。

以上の三段階を通して、シナプス連結のすべてを終り、脳細胞機構は完了する。図表2の中で示した人間Cは100パーセント完了した場合のハードウェアとソフトウェアが釣り合っている場合を想定した例であり、人間Bはソフトウェアの方が優れており、Aは知的能力の高い割に創造性の低いまま完了した例である。20才後

は、どんなに努力しても配線機構そのものを改めることはできないから、ここで一生使用する一つの完成した機械を買い込んだことになる。そんなことを知っていたら、もっとなんとかできたはずだ、とはだれでも一応考えることである。しかし後悔は先に立たずということわざの通り、現に20才前の児童、生徒の実体をみても、日々の学業や生活のめまぐるしさの中で、自己の頭脳配線など気にする機会はとても考えられないから、生活を共にする成人の環境構成よろしきを得なければ、瞬時も休みなく流れていく時にまかせたまま、取り組みやすい目の前の事情を追っていることで（といて遊びほうけるのでなく、世間知や分別知のレベルを乗りこえる芽が育たないまま）貴重な時を失っている場合が多いのではあるまいか。

20才以後は、与えられた自己のメカニズムを、いかにして、みがきをかけながら使いこなしていくかということになる。記憶力などは35才頃から下降線をたどるが、ソフトウェアの方は、練磨次第で年齢に制限なく質的に向上するものだと言われていることは何よりも幸いなことである。しかしそれも坂道を登るようなもので、前向きに努力を続けていない限り、自然の力で後へ引きもどされる。人間の能力は、不動のまま停止していることは許されない。進むか退くかの2途しかないのであるから、絶えず問題ととり組んで思考や活動能力を働かせ続けながら人類の新しい道を切り開いていかなければならないのである。

2 1970年代を生きぬく人間の条件

2・1 自律的に生きる態度

現代の教育が、幼・小・中・高の期間を通して、進学のための能力養成を実質的なねらいとし、アチーブメントテストやIQによる点数化によって人間全体を評価する傾向があるとすれば、それは、民主社会の中で、秩序を重んじ、自己の行為に自信と責任をもってやりぬく人間教育が積極的に企画せられているとは考えられない。教育において、文化遺産を理解受容することは、教養ある現代人としての先決条件ではあるが、そのことと、主体の人間が、現代に生

きるために責任ある行為をしたり、自己表現をすることは（1・2でも述べてあるように）一応区別して考えなければならない。すなわち、ことの大小にかかわらず、自分のことは自分で答を出し、それに責任をもたなければ気がすまないようにならなければならない。ところが、学習の点数化が直ちに人物評価に結びつく印象を与えるようになると、いつの間にか自主的態度にも自信を失い、すべての人間行為に、何か客観的な規範や典型を求めて動くようになる。ある子供が、両親にしかられたとき「A君がやってもよいと言ったから」というような責任転嫁の言葉を用いたとすれば、自己疎外もはなはだしいことになる。他人の意見を求めたにしても、それは自主的解決の参考にする性格のもので、行為の責任は、はっきりしているはずである。そのような傾向は、どこからくるのだろうか、これも日々の生活の中で自己不在の例を子供の前で示している母親がありはしないか、「主人が、このように申していますから」とか「そんなことをすると、おとうさんにしかれますよ」などの言葉の中に、ひとりの人間としての母の責任ある存在を自ら捨てている場合がある。このようなことの繰り返しは、学生運動への参加にも通じるものがある。一方的な分別知だけで学外の政治活動に参加し、熟慮不足のまま多数の力で暴力という具体的活動の結果を出すことがあるが、そこには人間行為としての責任は一切とられていない。学生のひとりひとりとは話が通じて、ヘルメットをかぶると目の色が変わり、一切の話が断絶するという不思議な現象が起る。そのような自律性の弱いものに限って、解放せられた自由さの中では野放図になるものである。戦後25年を経過した70年の万国博では、科学技術や経済性の進歩について、世界の人びとの賞賛を受けているが、他方、これが同じものを創造した国民だろうかと思われるような万国博見物人の不行儀な態度にきびしい批判の声も聞かれる。

心の中にしみ込んでいく真の人間教育は、知識を与えるように速効的にはいかない。テンポはのろいし、まわり道をするものである。

自律的に生きる人間行為は、さまざまな要因を総合的に積み上げてできるソフトウェアやC

Qの能力が真髓となるものだから、それは評点化して示されるようなものではない。人間教育という立場では、このようなパーソナリティを中心とし、その上にハードウェアやIQを問題にするのでなければ、真の教育とは言えない。

とくに現代文明の様相をみると、その量の増大において、質の向上において、また多様化の実際など、その変化の急激なことは瞬時も予測できないスピード振りである。そうした中を生きぬいて発展する人間の実力を考えるとき、わけても、今の幼児や小学生が実社会に出て活躍する日のことを考えると、少なくとも十数年以上先のことであってみれば、その基盤をつくる現時点での教育はいかにあるべきだろうか、現代のテンポに加速度を加えながら変化する様子を想像しただけでも恐ろしいことになる。しかし結局のところ、変転する世の中にあっても動揺することなく対処していくためには、広い情報網をもちながら、自律的に生きていく強い信念をもつ人間をつくることである。自律的に生きるということは、主体的人間として生きることである。主体的ということは、自由な独自性という考えもあるが、自己中心の小我ではなく、人類に責任をもつような自己の全能力を信じて行ずることである。

統計によると、中学生のうち3割に非行性がみられるということである。現代の教育が、形式的には個性の尊重や民主的精神を論じていながら、目前の進学に必要な相対的能力の枠にしばられて、絶対性をもつひとりひとりの人間を育成する機会を失っているように思われてならない。そうでなければ、あの若々しい純情な血がうごめきながら成長し続けている児童、生徒等が、ニヒリズム的傾向をもつようになるとは考えられないのである。そのことは、永い間の入試から解放された大学生の生活をみるとよくわかる。すなわち、いつの間にか人の欠点が目につくようになっており、わるいのは自分ではなくて他人だと思ひ込み、ささいな不公平も承知できないし、こらえ性がない。そして一応自己の権利を主張し続けてはいるが、自由の場で主体的に自己の道を自分の力で切り開き、がんばり抜くねばり強さを失っている。年齢的には成人であっても、社会的秩序に対する責任感な

どはとくに低い場合がある。ということは、せいぜい分別知の程度で処理することで追われており、人間の真知のはたらきを、身をもって感じとる機会が少なかったのだと思われる。

2・2 自律的に生きるための内的条件

2・2・1 「自由」の精神

自律的に生きる人間条件の第1は、人間はいかなるときにも「自由」という精神的空間の中に自分を位置しておかなければならない。自由とは勝手放題ではない。禅で言う「随所に主となる」ことであり、自分が自分になり切ることである。いわゆる「空」⁽⁹⁾や「無」の世界を体得していることである。やさしい言葉で言えば、雑念を去り、概念にとらわれない心、権力にも左右されないで自由に生きる精神で、自分の全能力と責任において努力できる自由発想の場をもち続けることである。

川端康成がノーベル賞受賞の時の講演「美しい日本の私」⁽¹⁰⁾の中から拝借すると『……………無念無想の境に入るのです。我をなくして「無」になるのです。この「無」は西洋の虚無ではなく、むしろその逆で、万有が自在に通う空、無涯無辺、無尽蔵の心の宇宙なのです。禅でも師に指導され、師と問答して啓発され、禅の古典を習学するのは勿論ですが、思索の主はあくまで自己、さとりは自分ひとりの力でひらかねばならないのです。そして論理よりも直観です。他からの教えよりも、内に目ざめるさとりです。……………』と述べているのも同じ精神であろう。このような精神は、成人の立場では、道の修養をしなければ得難いことのように思われるかも知れないが、そして求めても与えられるとは限らないが、自分の心がすなおになれば「自念即仏」・「応念即至」⁽¹¹⁾といわれるように、時を移さず与えられるものである。それが幼児の場合には、無意識のうちに、天から与えられているものと考えてよい。すなおな気持でそれを伸ばしてやりたいものである。自由にとっても、わがままに放置するのではなく、自己に責任を感じさせるようになるまでの正しい伸ばし方をしていくのが現代の教育である。

自由を必要としないのは、前頭連合野の働きをもたない動物や3才前の乳幼児である。とこ

ろが、よくよく考えてみると、3才以上の正常な人間教育の現状でも意識しない間に、自由思考の空間を与えないような人間活動を強要し、前頭連合野の働きをにぶらせていることが多い。教育ママが教育効果に熱心なあまり「ああしなさい。こうするものですよ」と結論を急いで与えることによって、子どもの責任ある思考力を鍛える機会を失っていることを意識しているだろうか。「宿題はやりましたか」「勉強の時間ですよ」と注意したいのが一般の母親だが、その声を聞かなければ動かないようでは自律性は養われない。そこで大切なことは「放つ愛」の精神である。学業成績が一たん落ちるかも知れないが、子供自身からやる気を起こすまで放つことが、やがて一生を通して、自分のことは自分で責任をもつという態度をつくることになる。

マスメディアの発達したこの頃では、その便利さが逆に人間の思考力をにぶらせていることがある。またそこから得た知識を、そのまま自分のものにして振りまわす場合がある。それらは、すじを通して活用する方法を指導する必要がある。すなわち、自覚ある人間としては、自由と責任のある思考を通したものでなければ、自分のものではない。実質的には、文化遺産を生かし、広く他人の意見も参考にすが、それらはどこまでも手段であり、資料としての位置づけである。このような態度が徹底しておれば、自己表現の責任もはっきりするし、創造へのよろこびも一段と深い。

自由な心のときは、心の健康なときである。それは、すなおな心でもあり、緊張からも解放されているもので、その人にとっては最高の頭の働きをするときである。「試験の答案を出してドアの外に出たとたんに、あやまちに気がつく」と言うことも緊張が平衡感を失っていたことであり、野球のT監督が「勝目に向ったときには、良いアイデアが次々と出続ける」と言ったことなども開かれた心や平明な心の大切なことを示している。

自由な精神の中で、最も大切な項目は柔軟性と自主的な態度である。柔軟性はステレオタイプと反対に、発展的に開かれている心で、自由

に観点をかえて、限りなく新しいアイデアを出すことができる。「天才とはおどろくことだ」とも言われているように感受性を敏にし、おどろき続けることでもある。質問も、小さい子供のように、すなおに出し続けることによって、より幅広い知識や経験をつみ重ねていくことになる。

自主的な態度は、人間の中心核がしっかりしており、自分自身に対する真実の勇氣をもっていることである。そして何事についても「私はこう思う」という主体的な態度を失わないことで、与えられる情報も、そのままでは受け取らないという点で柔軟性とは対立する性格である。すべての創造は、矛盾するものが相補い合って第3の新しいものを形成する。テュミンが「安全より冒険を、同調よりも個性を」と言っているように、問題を解く力よりも問題を発見する力の方が先ず必要である。

2・2・2 自信をもつ

自信をもつということは、高慢やうぬぼれの態度ではなく、否定的な感情をすてて、自分の成功を信じ切って努力することである。すなわち、自己至高の能力を自覚し「観ずればあらわれる」というように、心の奥の眼で、すでに創造したものの姿をじっと見出しているものとして行動することによって、自分でも予想しなかった能力を発揮するもので、まだ実在しない新しい世界を創造するためには、こうした精神が基本的に必要なのである。人間本来の能力として、小さい子供はそれができる。しかしアダムとイブのように、知恵の実を食べると楽園からも一応追放される。

自信を回復させるには、子供の心を安定させ、のびのびと自由発想ができるようにすることである。それには和顔・愛語・賛嘆と言われているように、教育に当る人の明るい顔であり、また明るさと希望を与える言葉であり、さらに優れた点を賞揚する態度である。広義の「言葉の力」には、言語以外の表情や行為も含まれているが、このことは人間教育にとっては最も重要事項である。

ところが、教育の現場では、「教育とは、人の欠点を見つけて指摘することなり」とでも言

いたいほど、家庭でも、学校でも、小言を言ったり、否定的な言葉を使って教育することの多いのに驚く。成人の場合でも、自分の行為に対する批判的な言葉は、理論的には有難いことだが、感情としては受け入れ難いものだから、その方法を考えねばならない。中には反抗心をおこすことさえある。そして、逆効果として、自己の欠点を意識させる暗示となって、人間の心にマイナスの潜在意識を強化させるようになる。それを意志力で追い払った上に、プラス面の建設をすることになると、そこで費されるエネルギー量は大変なものになる。その反対に、明るい心で、別の長所をとりあげて称揚すれば、それがささいなことであっても、快的なふんいきの中で、長所を伸ばしながら、同時に欠点も正していくことができるものである。

そのようなことはわかっていながら、なぜ、自分の子や教え子に対して称揚の言葉が出にくいのだろうか。週刊誌でも、他人のプライバシーを争って取りあげているし、主婦の集まりでもその辺に魅力があるようでは、他人の欠点だけが目につくような子供ができるのも無理のないことかも知れない。

2・3 自律的に生きるための外的条件

2・3・1 客観的基礎能力の向上

客観的基礎力は1章で述べている外的能力（ハードウェア）に当るもので、ソフトウェアを具体化するための必須要件である。ただし、このトレーニングによって、創造力が硬化するようなやり方にならぬよう柔軟性と発展性のあるものでなければならない。一般に低学年では、創造活動の中で、すなおなかたちで基礎力をつみ上げていくこともできるが、高学年では、創造とは別の要素学習として、その意味を理解させながら実施することも必要になる。

2・3・2 生きがいのある体験の必要

人間らしく生きるということは、人間としての働きをして生きがいを感じることである。生きがいを感じるということは、自己の情緒的調和感を客観的に表現して成功感を味わうことである。そのことは、他人の称賛や激励によって一層感激を深めることができるものである。

a 自己実現の欲求を満足させる

前頭連合野の健康な活動力をもつ人間は、他の動物とちがって、自分で感じ、自分で決断し、そして自ら実践することによって自己を自覚するよろこびを本能的に求めている。それが創造の喜びであり、熱中することのたのしさである。子供が3才頃になると、あらゆる面で自己発揮の行動をする。親がその意味を理解して、めんどろがらなければ、いくらでも、その素質をのばしていくことができる。しかし情報時代の親達は、教育では成人の常識を少しでも多く与えたいと意気込んでおり、人間教育は、教え与えることよりも、それぞれ持っている素質を、使用させることによってみがくのだということを忘れていようである。そして子供にとっては、かけがえのない遊びの体験（それは子供の積極的な勉強であり、また全人的表現ともなる貴重な体験）を軽視する傾向がある。

学校教育を受けるようになって、情意の教育が重要であるとは知りながら、上級進学に直接関係がないという功利的な精神が、そっと出て、いつの間にかそれから目をそらせる結果を招いているのが現状ではないか。子供が机にしていることが確実な成長だと思い込んでいる間に、子供にとって最も大切な意味と時とを失っていることがある。きまりきった知識は後からでも与えられるが、人間表現の経験は、時を失っては意味がなくなるばかりでなく、それは時をかえて、まちがった方向に発散することになる。去る夏の新聞記事の「青少年と非行」の中で、成績も上位のおとなしい中学3年生が「たばこ」をはじめて両親を心配させている内容があった。その生徒の言葉に「ぼくの場合、いつもテストのこと、高校入試のこと、父母や先生のことが頭にこびりついていて、おそれたり、いらいらしているんです。ところが、たばこをのむと、いらいらがなくなるし気持ちがおちつくんです。……自分の意志でやっているのは、たばこをのむことだけだから……」と述べている点は、明らかに自己表現の不足を物語っている点で反省させられる。

b より高次の創造性に高める

人間表現では、単に本能的欲求を満足させる

ばかりでなく、より高次の創造性に高めるのが教育である。それは基礎的な部分能力の向上や、より広い情報収集と同時に問題に立ち向う意欲を旺盛にし、直観力や想像力を豊にすることである。よいアイデアをだすには、没頭する時間と休息する時間とのバランスが大切である。そして取り組んで熱中する場合の注意力、好奇心、実行力、忍耐力などは真剣に回数を重ねることによって進歩向上する。

創造力といえば、むずかしいことのように考えるが、子供の心に必要なのは「やったぞ」という成功感を体験させることが何よりも大切なことである。

c 遊びの役目

人間は絶えず自己に対立するものによって自己を限定されることによって自己を自覚しながら成長する。対立するものが大きければ大きいほど、人間表現の結果も大きさを加えるのではないか。人間表現は、知識的な学習とちがって、時間的系譜をもつものであり、かつ、多次元的な要因の調和を必要とするものであるから、問題によっては、学校で機縁は作っても、それ以上に発展しない場合もある。そのような問題は：休暇のように連続した機会を選ぶことになる。もちろん学習課題を通しての表現や、その他日々の生活現場で、自律的に生きる内的条件を満たすような環境や、遊びの空間を、それぞれ年齢に応じて整えてやることは、教師や親達の責任である。

人間のことを、ホイジンガーがホモ・ルーデンス (homo ludence) と言ったように、遊びは人間の自然的要求であるが、乳幼児においては、身体活動を通して、シナプス連結を、よりよくしようと勉強することであり、障子を破ることも、白いふすまに思い切ったらくがきをするとも、すべて貴重な感激の経験を脳細胞に記録していくものである。小ねこが、小さければ小さいほどじゃれつくように、乳幼児のいたずらは、成長のための本能的なトレーニングであり、それはさらに前頭連合野の配線をする3才頃になれば、創造のよろこびとして一層重要な意味をもつようになる。成人の遊びは、レジャーとして、頭脳細胞を更新させ、思考をシャープにするために、複雑な情報から一時離れて

休息する意味であろうが、子供の場合は、それが、創造体験としての積極的な意味をもつものであり、真剣な社会的勉強の場となるものである。母親学級での質問に「学校から帰るとすぐにかばんを投げ出して遊びに出て困る」という声を聞くことがしばしばある。これは自己表現の不足を補っている場合で、学校での過密ダイヤが受け入れであった場合には、人間表出の勉強を、しかも集団の中で行う意味を理解してやらなければならない。

2・3・3 社会性のしつけ

自己表現や想像活動が、人間性の特徴であるとしても、人間は孤立して生きる性格のものではないから、民主社会での秩序維持や心の調和が保たれ、他人にも迷惑をかけないことが常識にならなければ、正常な人間の生活とは言えない。リード (Herbert Read)⁽¹²⁾ も、その教育目的の中で「教育の目的は、必然的に個人の独自性と同時に社会的意義、もしくは相互依存を発達させることにある。個人は必然的に唯一無二のものであるから、ひとりひとりの個性が全人類にとって、かけがえのない意味をもつことになる。しかし、この独自性も孤立の状態では、なんら実際の価値がないので、個人は社会の有機的全体の中で、その個性が発揮される必要がある」と述べている。このようなしつけの第一歩は家庭集団の中での基礎教育が、その責任を負わなければならないものである。

a 小さい時ほどきびしくする

人間社会に生きるには、生まれおちた日から、そのきびしいしつけがはじまる。しかし幼児は、それをきびしいと意識することなしにしつけられていくのである。

しかし日本の家庭では、幼児の無邪気さに心をとられて、過保護の習慣をうえつけている場合が多い。そして、反抗心をおこすような時期まで待ってからしつけをはじめようとして気がついてみると、いつの間にか、反対のしつけをしていたことになっており、それが一生を通して親も子も不徹底なしつけとして苦しみ続けることになる。中には「この頃の学校は何をしているのか」などと、しつけの責任が学校にあるように考えている親もある。シナプス連結の第

1期である3才までの無言のしつけが第二の天性をつくることを認識していないようである。

b 成長してからは、社会的秩序に対して創造的に参与する

4才以後の第二、第三期の指導では、前頭連合野の働きをさせることが大切なので、社会的秩序に順応する場合にも、その精神を理解して、積極的に協力する精神が必要である。そして常に自己実現の創造的態度で、前向きに参与することである。すなわち、同じ協調精神をもっている場合にも、具体的な方法としては、よりよい方法や根本的な改革の必要を感じる場合もある。そのような場合に、新しい創意のひらめきはあっても、それには孤立した不安もあり、社会的諸条件の影響もあって、同調的に安全感のある方向に引き込まれ易い傾向があるので、人間の自律的な意義と責任において、率直に意見を述べ合って行動するよう、絶えず、ひとりの人間としての自覚をもたせ、能動的に活動するような指導が必要である。

3 創造活動について

創造とは、人間が、これまでにない新しい価値あるものを生み出すことであるが、その精神的母体は、ソフトウェアの中心となる広義の「情操」に外ならない。そしてこれを価値形体として具体化するものは、ハードウェアとの総合力であり、その過程では、両者間にフィード・バック (feed back) が繰り返される。

3・1 創造の段階

創造の段階では一般にワラス (wallas,G.)⁽¹³⁾ の4段階 1 preparation, 2 incubation, 3 illumination, 4 verification, などがあげられるが、ここでは次のような段階で考える。

第1 問題意識

その道のハードウェア能力として、知識・技術・感覚が整っていても、新しいものを求める問題意識のやる気が積極的に発動しなければ、すべての創造活動は発足しない。空を飛びたいという熱望があったからこそ飛行機も考えられたろうし、月へ行ってみたいという人間の夢がアポロ計画や宇宙船を生んだものである。し

かしまた人間の夢が、観念の世界にビジョンを形成し、創造が直観にはじまるものであっても、それは心霊術ではない。原子物理学について、何も知らない家庭の主婦が、中間子の存在について突然にわかったなどということはあり得ない。要するに直観や洞察は、ひとつの問題に没頭し、出口を求めてもがいている人たちにだけひらめくものである。それも、創造する目的物の性格によって違うから一律には言えないが、まとめて言えることは、後に述べるR思考型の創造では、第一に基礎が十分にできていること、第二に普通のやり方に不満をもっていること、しかもその不満がどれだけ緊迫感をもっているか、そして情緒的にどの程度それにとり組む姿勢ができていくかということである。第三には、その問題解決のために、あらゆる一般的なやり方について、それは無駄と思われるものまで、人事を尽して努力することである。そうすれば、頭脳の働きとしては‘意識的、無意識的に問題を考え続けていることになる。そのような状態の時に、しかも純粋的に開放された心の中で、何かのきっかけで突然の道が開かれるものである。芸術的創造のようなA思考型の創造では、前者とはちがった生々しい情意的な表現ができるが、それにしても、創造は単なる風変わりなものでなく、その中に広い意味で社会が容認するような価値をもっているものでなければならない。とくにわれわれが、普通教育の中で考えようとしている創造活動の問題は、一部の天才や特殊才能者の創造性を問題にするのではなく、普通の健康な人の創造として、マスロー (Maslow, A. H.) の述べる「自己実現の創造」⁽¹⁴⁾ について考える場合には、その共通なものを特有な方向に結晶させる創意を大切にすることがある。美の創造についても、リードが個性的なオリジネーションの原理と客観的なフォルム⁽¹⁵⁾の原理との弁証法的統合と述べているのも、そのことである。いずれにしても第一に大切なのは積極的意欲である。

第2 創造的想像

問題意識でもある動機的要因に対する解決的着想として、心のうちに新しいビジョンをつくることである。これは問題解決の見通しとしての洞察であり、インスピレーションを得ること

であって、これは美の直観でもあり、科学的秩序感覚をキャッチすることでもある。湯川秀樹の同定理論⁽¹⁶⁾（図形認識）や市川亀久弥の等価変換理論⁽¹⁷⁾、川喜田二郎のK J 法⁽¹⁸⁾・中山正和のNM法⁽¹⁹⁾などもこの発想に関する理論である。

発想の性格としては、感受性と潜在能力とが統合的に働いて、これまでになかった新しいイメージを形成するものである。感受性は、知覚を通して鋭く感じとるもので、これまでに潜在していたとは言えなかったような関連を読みとって新しいものを創り出すヒントになるものであり、潜在能力は、生まれつきもっているものや過去の学習や現実的な体験のモデルが、個性的な情操のエッセンスとして積み重ねられているものである。

想像の清新なひらめきは、創作者のはっきりした意志や意識的な努力と直結しているとは言えない。自然の風景などに、こうこつとしたときなど、無意識の一部に切れ目ができ、その間からひょっこり顔を出すようなものである。そのときのひらめきは、想像の内容や個人の性格で、さまざまな様相を示すもので、一般には全体像としてのビジョンはうかぶが、まだ具体的にははっきりしていないものである。そしてすばやくメモしておかないと、ひょっとしたことで消え去ることもある。

これは、認知に伴う感情から言えば、マスローの言うB型認識⁽²⁰⁾である。D型認識が Deficiency を感じさせるような普通の認識で、対象と自分とが対立し、概念にしばられたものであるのに比べて、B型認識は、対象と自分とが一体になっており、存在するのはひとりの Being だけだというような絶頂感 (peak experience) を経験することである。これを効果的な驚き (effective surprise) とも言われている。

創造的想像にも二つの傾向がある。すなわちA思考⁽²¹⁾ (affective thinking) とR思考 (rational thinking) との両方の性格が入り交っているからである。A思考の方は、論理を捨てて童心にかえった気持で、情緒が主導的役割をしているもので、漠然としたものではあるが比較的永続するもので、最後まで発想のときの自主的なアイデアを一貫して持ち続けて具体化するもの

で、絶対的な性格をもち、うっかりすると、ひとりよがりで終ることがある。芸術や哲学的思考や心象の自由表現ではA思考が主体になって働くものでA型の創造と言ってよい。これを、より充実するには、作者のパーソナリティ全体の向上が大切になる。

R思考の方は、合理的思考内容が生のまま記憶されていることよりも、圧縮されたパターンとなり、潜在力となって高度の無意識に入ることによって、豊かな情操として充実している必要がある。A思考とちがっているところは、はっきりした気分だが、比較的瞬間的にひらめいて過ぎ去ることである。したがって、それを意識的につかみとるチャンスを失うと永久にとらえられないこともある。これは科学や数学のように客観的・目的創造の場合で、具体化や検証に当って、多くの合理的な秩序を駆使する場合である。この性格では、生活造形の創造や科学原理のような無人称性の発見まで考えられるが、アインシュタインは、発見はほんとうの意味での創造ではないと言っている。しかしその発見の過程では「世界の物質的構造の性質を究明すればすれほど、ますます審美学上満足すべき数学的調和に頼るように思われる。」と言うように、創造的想像や直観によらなければならない点は同じである。いずれにしても、R思考では基礎事項のトレーニングによって、ピラミッド型の積み上げが重視される。このようにR思考が主体になるものをR型の創造と考える。

いずれの創造でも、A思考とR思考が両極にあって、その間を往復しているものである。しかし発動の中心になるものは、つねに情緒が主導権を握っているものと考えなければならない。情的エネルギーについては、ラビノウィッチ⁽²²⁾ (Eugene Rabinowitch) が「物理的世界についての解明が増大して、人間の精神や感情の概念によって支配されていた人間経験の分野が徐々にせめめられ、原子科学の発達で、人間の世界が、ボタンひとつで消滅するような小さな存在になりつつあるが、しかし、そのボタンをいつおすか、あるいはおさないかというキーポイントは、人間の生命的判断力（情緒）にまかせられている………」と述べているように、物

質界の観察から得た法則を、人間存在の精神的局面にまで延長してはならないし、人間の精神的経験は、物質的現象の経験と同様に人間存在の論議の余地のない重要な部分を構成しているのである。ボーアの相補性原理やハイゼンベルグの不確定性原理にしても、理性的思考では不可能なもので、情緒を備えた有機体としての人間力の協力なくしては発見できないものである。

第3 具体化への決断

以上のようにして、新しいイメージが形成されたとしても、それは心のうちにある仮象の姿であるから、具体化して示さないと社会的な価値は生じない。科学的な仮定も、これを検証⁽²³⁾によって示さないと客観的な意味は確立しない。たとえば、愛情の精神があふれていても、これを表現して示さないと、この世では実を結ばないのである。このように内にある自己に具体的な形を与えることは、ひとりの人間が、社会環境の中で意味をもったことであり、個人が世界性をもった人間になることである。木村素衛⁽²⁴⁾が「心の内に見たものは、外に見られるようにしない限り見終えたのではない。」と述べているのもそのことである。

さて、そのビジョンを具体化するために能動的にとりあげることは、ほんの瞬時のことであり容易に展開するように見えて、実は思いきった決断と心の飛躍を要するものである。ビジョンとしてのアナログ的な feeling の中から一つのかすかな光を見つけて、これだと決断する。そのときは、すでにデジタルな情報の一片（具体的な媒体について、また専門的知識や能力）が飛び込んで結晶をはじめるときである。創造の発想としてのビジョンを次々と創りだすには、美術の立場で言えば、個性的な想像活動としての Origination の原理（ソフトウェア）が幅広い教養によって高められていることが必要であるし、具体的に結晶をはじめための客観的なform の原理（知覚機能としてのハードウェア）の実力が充実していることが条件である。ここで重ねて強調できることは、想像力が豊かで、感覚や技術が上達していても、この具体化への決断が決的に展開しないようでは、新

しい創造を実現することはできない。

女子学生を指導して感じることは、するどい直観力をもっていながら、それが防衛的、受動的な場で鋭敏な割に、積極的決断や前向きの実践力に発揮されることが少いことである。創造的体験が、人間教育に貴重な意味をもっているのは、この第三の段階で、あらゆるカオス（chaos）の中から、その人独自の美しいコスモス（cosmos）の光明を感じとって発想の決断をすること、その点にあるので、この点を大切にしないと、次の段階が単に技術的労働の意味にしかならないのである。

第4 具体的実現

着想を具体化することは、精神と感情の世界を物質的実在の世界にかえることなのである。イメージを具体化すといっても、そのままのデカルコマニア（Decalcomania）的転写は不可能なことだから、主観的なものと客観的な媒材との相互関係の連続的發展によって、これまでに存在しなかった新しいものを創造するものである。1・2でも述べたように、精神界に描いたものを現実界に示すためには、具体的な媒材を駆使するために、自由な人間以外のきびしい秩序にしたがっていかなければならない。芸術の場合でも、音楽と美術と文学とでは、まったくちがった内容の基礎がある。科学分野についてもびりっと感じる調和感と同じでもそれぞれ異なった実質内容をもたなければならない。さらに科学と芸術のちがいは、その創造的過程に類似点があっても、科学の終着点では、万人共通の客観的内容として理解されるものであるが、芸術の場合は、ブロー教授（Edward Bullough）の分類のように、創作者のパーソナリティによって思索的な人、感情的な人、感覚的な人、直⁽²⁵⁾観的な人の表現は、それぞれちがった感銘を与えるものである。さらにそれらの表出と秩序づけのあり方は、各時代によっても異なるべきもので、それぞれの時代の人びとと外界との記念碑として残されるところに人間的表現の意味があるものである。

3・2 人間性の表現としての創造活動

人間が心の内に感じたことを外に具体化する

とについて、さらに考えを深めてみると、内にある自我（人間性）が外界との力動的な関係にあることであり、三木清は「生命はみずからの形として外に形をつくり、物に形を与えることによって自己に形を与える」といっているように、柔軟性と自主性をもって自由に生きようとする人間主体も、その姿を抽象的にはとらえることができないもので、何かの問題と対決し、仮に動かぬ現象として限定されることによって（対象と共に生きる人間の真の姿として）はじめて自己を自覚することを、ここでも再確認しておかねばならない。

前の項目で、直観や想像は、心の内にある仮象の姿であるから、それを、具体的に実現（検証）しなければ価値がないと述べたが、この言葉で示す限りでは、本命が具体化された創造の結果にあって、直観や想像は、その手段的過程にすぎないようにも感じられる。しかし一度具体化されたものは、あたたかい人間の手から離れて固形化したものだから、自主性ももち、自由に、しかも永遠に生き続けようとする人間の生命力について考える場合には、人間能力の根源として無限の可能性を示してくれる直観や想像力の方が本命である。とくに幼児教育や義務教育期間にあっては、創造の結果であるハードウェアの能力を学ぶことよりも、その過程における全人的活動の実際を通して人間能力の基礎をつちかうことが大切である。

⁽²⁶⁾ 宗教用語では、人間の精神的実体を実相と言い、現象界に展開する諸事項を仮りの姿としている。したがって、先に述べた用語からすると、仮象という言葉に逆に使ったようであるが、これは、人間とその表現のデリケートな関係を示したことになる。現実界での生活創造は、心に観ずるだけでは生活の創造とはならないのであって、設計図はできても建築しない家のようなもので、人間能力としては究極的に行動によって実現しなければ意味がないという考え方が一つの理念である。しかし、さらに重要事項として、その建築結果の实在にのみとらわれているようでは、その改造や、さらに新しい進歩・発展は望めないことなので、無限のアイデアを出し続けるには、まず物質や道具を用い

ないで、心の中に建築を想像してみなければならぬもので、五感を超越し、さらに第六感をもり越えた無限次元の世界で自由にはばたける実相界が、人間の真実の能力になるという前向きの理念を述べたものである。

宗教上の努力では、もっぱら、実相の真理を悟ることにおいている。そして「三界は唯心の所現」として、心に念じ、言葉に表わすことによって、その大調和の姿を現象界に見ようとするもので、「人間とその表現」に関する理念に相違はない。サルトルが「芸術は、まったく非現実的な想像の世界に属するというが、その意味は、非現実的だという消極的なことでなく、この世界は客観的なものの世界と対等であるという積極的なことである。」と述べているが、それは「客観的なものの世界と対等以上に積極的なことである」と改めなければならないであろう。

⁽²⁷⁾ 般若心経にも述べてあるように、色性の中に空性を見ることができるようになれば、そして、空（無）から一切が創造されるからこそ無尽蔵であるという真理を知ることができれば、人間性のもつ限りない生命力に、たのもしさと生きがいを感じることができるようである。しかしわれわれが、自由を手に入れる機会を得てから20数年になるが、それはまだ十分にそしゃくされてはいない。経済成長という外的能力では世界的に注目を受けるようになったが、真の責任ある自由国民の内的能力という立場では問題が山積している。70年代の課題は、人間性の回復とその個性的な自己実現の教育に、幼児時代のスタートから、信念をもって当らねばならないものである。

4 幼児期における造形的表現活動の意味

これまで三つの章で述べて来た幼児の人間の成長とその現代的な方向、そして人間表現の構造という立場から、造形的活動が、どのような姿で解け込んでいるかを考えてみよう。

4・1 子供は活動的である

第2章の3でも述べているように、子供は真

に活動的である。五感の発達から言えば、まず触覚があげられる。動けば何かに触れる。空気・形体・材質などの物質がそこにある。乳幼児について考えても、それは、直観が先か行動が先かわからないほど一体的なものとして、手足を動かし、頭脳を働かせて、さまざまなことを感じ、思い、さらに確かめたり反省したりすることを繰り返している。すなわち母親のスキンシップにはじまって、触覚によって得た経験を、自己の頭脳配線のために、それぞれ独自の信号を送ったことにちがいない。聴覚や視覚を通しての成長も同じことであって、そのときの直観は、たとえ超意識的なものにしても、美も科学性も含めた秩序の調和感が、その人を動かしたものであろう。

前頭葉が健康な活動をしだしてから人間はだれでも、自己表現の欲求を本能的にもっており、自己の情緒的調和感を外に表わすことによって、創造的表現のよるこびや熱中するたのしさ、そして成功味の味、また、失敗のかなしみと再起への情熱、そして社会的にも、役立ちたい、認められたいなどの人間的な心の満足に生きがいを感じることが人生であるから、子供は子供なりの成長期の各段階にあって、その瞬間瞬間の場で、充実した生きがいを感じさせることが大切である。あの豊かな生命力をもつ子供も、抽象的には成長のチャンスをつかむことができないが、何かの機縁をつかんで、一つの具体的な現実として全力を傾けてそれに熱中しながら自己を自覚することによって、一段一段と確実な成長のステップをふむことができるのである。

成人の創造では、世間知や分別知にわざわざいわれて、第6感としての純粹直観を得るまでには相当の努力を必要とするものであるが、幼児の段階では、直観という心のひらめきとその具体化の行動とが、びったり結びついて同一化しているのは、童心の純情さがそうさせるのであろうが、いわゆるマスローのB型認識も、きわめてなめらかに純粹直観として観じ得られるし成人が大きな抵抗感をもっている表示力としての感覚や技術についても、取越苦勞を知らないまま、真正面からとり組んで実行しているので

ある。

4・2 造形材料の特質

幼児の心情が、いかに純真であっても、その心情を具体化する場合の物質的媒材の性格まで変質させるわけにはいかない。しかし造形材料は成人の使用する表現材料そのままだが、幼児にも扱える。すなわち造形諸材料は、無意識の表現も可能なほど扱い易く、かつ微妙さをもっており、その種類もバラエティに富んでいるものである。そして二次元三次元の構成も可能であり、どろんこ遊びにも、そのまま使用されるような可塑性のものから、科学技術の現代的進歩をそのまま活用するような技術的意味をもつものまで豊富に用意することができる。しかも、それは、われわれの日常生活の場で平素から親しんでいるものであり、廃材としても、心すれば得易い性質のもので、子供等の遊びとも直接結びついているものである。そのことは、文学的表現の前に文字や文章を必要としたり、音楽が、その自由表現以前に、楽器の操作法や音の秩序を習得するために、成人の作った典型を学ぶやり方とちがって、幼児の最初から、ひとりひとりに、自由な自己表現感の体得を、しかも遊びの中から発展的に指導していかれるのは、この造形材料の特質である。

4・3 幼児教育における造形的表現の直接的なねらい

a 未分化的総合性の広い体験をさせる

一般に幼児の表現活動は、その年齢が低ければ低いほど、未分化的な総合性をもっている。そのことは古代人の造形活動について考えてもわかるように、当時の *ars* や *ART* という言葉の意味が、日日を真剣に生きぬくための人間的な創造行為として、今日でいう技術 (*technics*) の言葉に近い総合的な意味のもので、現代技術に対して用いられる芸術の意味はなかったのである。一般に原始人の造形文化を原始芸術と呼称されているが、それは現代から遠く離れた造形作品として心のゆとりをもって見るからであらう。このように幼児教育の場合

も、それを文化史の中で考えれば、宗教的色彩こそないが、ルネッサンス以前の未分化的な広領域性をもっているもので、美術といっても、われわれが19世紀以後の純粋美術について考えるような、せまい態度で扱ってはならないのである。もちろん、幼児の純情さには、マチスやピカソも魅せられたように、純粋芸術精神で接することも必要であるが、そこには、月へ旅する人間の欲望として、科学や技術の最先端をゆくものも同時に、含みかつ芽ばえる温床であり、幼児にとっては、成人の世界から学びとって、それを確かめる知識修得の行為も含められていることを忘れてはならないのである。

b 創造的人間活動の全過程を経験させる

幼児の表現活動の意味は、たとえそれが無意識的な動作に見えても、子供は子供なりに、自分で感じ、自分で考え、主体的に実践して反省するという、人間が本来もっている価値創造の全体系を一貫して体験することによって自己を成長させている意味を理解していなければならない。すなわち、現代文明の中では、分業化・専門化・概念化・機械化していくことは、人間の限られたエネルギーを精度高く活用するためには、これを避けるわけにいかないことであるが、それを幼児生活や教育の場まで急いで持ち込んではならないのである。むしろ逆に、成人の生活が一方に片寄り、家庭生活までがインスタント化す傾向をもつようになるとすれば、幼児時代の生活は、ますますミューズ運動の性格を盛り込まねばなくなるのである。そのことは、人間の円満な成長という教育一般の立場から、デュウイ (john Dewey)⁽²⁸⁾ は30年も前から経験や行動を重視することを力説していたし、H. リードは、1965年日本で開かれた世界美術教育会議のメッセージで、現代人が自然との接触を失い、人間能力の健康な成長が疎外されようとしている点について「疎外とは、むしろ過去において人間に筋肉を鍛えさせ、知性を磨かせることになった、あのさまざまな活動からの、人間の感覚組織の心理的疎隔であります。人間の知性は、ジャン・ピアジェのような偉大な教育心理学者があますところなく論証したように、〃もの〃との関係において発達します。その長い歴史の中で人間は、外界の感覚的

印象を直接同化することによって、なかでも物質的なものを自己の肉体的、精神的要求に応じて操作し適合させることによって、これまでに知性を発達させてきました。人間のこの肉体的把握力も、現代の産業社会ではしだいに用いられなくなってきて、いまや萎縮してしまったりも過言ではないまでになっております。そもそもこの能力の萎縮が、ひいては人間疎外の原因となっているのであります。人間が、そのおかげで、これまでに知性を発達させてきた心的能力が、いまや次第に用いられなくなってくると、知性にかかわって通用するのは、根のない虚構の方式—数式のような—であります。まだわれわれはこの人間疎外の全行程を経験したわけではありませんが、それは人類全体の破滅に通ずる急勾配の坂道です。人類を悲劇的結末へと押しやる潮の流れから、自らを救い出す唯一の道は、手を使う技術や感覚的識別の手順を伴う、あのさまざまな活動にもどることです。」と述べ、子供の場合の造形的表現活動の重要性について述べている。

子供が、工作で自動車作りに夢中になっている様子を、その過程を追って見続けていると、一つの新しい存在が生み出されて、その役目ははたそうとする全コースを楽しみながら体験している様子がはっきりわかる。それは成人の社会で言えば、企業家であり、デザイナーであり、エンジニアでもあるし、労働者にもなって汗を流しているのである。そして最後には、テストパイロットにもなっているところに意味があるし、その生産的創造活動も、成人の場合とちがって、創造の結果がねらいではなくて、価値創造の過程が重要なのである。

c 個性的調和感の質的向上をはかる

以上述べて来たように、造形的活動を通しての教育では、個性的パーソナリティのすなおな成長に期待をかけるものではあるが、それが社会から孤立したままであっては価値がない。リードが述べているように、造形表現は、オリジネーションの原理とフォルムの原理との弁証法的な統合であり、また「人に通じる形で感情を表現する」ということの中で、ここでは、特にそのフォルムの原理、すなわち美的秩序感やその表示力という第三者にも共通する価値内容こ

そ造形表現独自の実質的内容であることをはっきり意識し、学習のあらゆる面で、その向上を考え続けねばならないということである。

要 約

- 1・幼児の人間の成長
 - 1・1 人間の内的生命力と外的実力
 - 1・1・1 内的生命力
 - 1・1・2 外的実力
 - 1・2 内的生命力と外的実力の関係
 - 1・3 シナプス連結の段階と教育
- 2・1970年代を生きぬく人間の条件
 - 2・1 自律的に生きる態度
 - 2・2 自律的に生きるための内的条件
 - 2・2・1 「自由」の精神
 - 2・2・2 自信をもつ
 - 2・3 自律的に生きるための外的条件
 - 2・3・1 客観的基礎能力の向上
 - 2・3・2 生きがいのある体験の必要
 - 2・3・3 社会性のしつけ
- 3・創造活動について
 - 3・1 創造の段階
 - 3・2 人間性の表現としての創造活動
- 4・幼児期における造形的表現活動の意味
 - 4・1 子供は活動的である。
 - 4・2 造形材料の特質
 - 4・3 幼児教育における造形的表現の直接的なねらい

参 考 文 献

- (1)(2)(8) 時実「脳と人間」1968, 時実「情操・意志・創造性の教育」1969, 時実「人間であること」1970
- (3)(4) 恩田・野村「創造性の開発」P171・168 1964
- (5)(6) 湯川・市川「生きがいの創造」P167 1967
- (7) 岡「春宵十話」P77 1963
- (9)(20) 橋本「般若心経講話」1970 庭野「人間への復帰」P37 1966
- (10) 川端「美しい日本の私」P22 1966
- (11) 石丸「色即是空」P64 1966
- (12)(15)(23) H. Read「Education Through Art」P6.42. 32 1953
- (13) 穂山「創造の心理」P6 1962
- (14)(20) A. H. Maslow (上田吉一)「Toward a Psychology of Being」P187.106 1970
- (16) 湯川「創造的人間」P113 1966「生きがいの創造」P.152
- (17) 市川「創造性の科学」1970
- (18) 川喜田「発想法」1969「続・発想法」1970
- (19) 中山「発想の論理」1970
- (21) 前田博「創造性を育てる教育」P45 1967「教育心理学事典」
- (22) E. Rabinowitch「Scientific Revolution Man's New Outlook」P15 1963
- (23) 小口「創造力の心理」P5 1966
- (24) 木村「表現愛」P130 1939
- (26) 谷口「生命の実相」P3 1969 橋本「般若心経講話」P134
- (25) J. Dewey (鈴木康司)「Art as Experience」1953
- (28) 日本美術連合「X V Ⅱ INSEA」P7 1965